

中原中也

◎特別寄稿

ボン・マルシェ日記 修復こぼれ話 秦博志
ちゅうとやーの「中也ソングブック in 鎌倉」
コンサートレポート 谷川賢作

◎特別企画展示

「宮沢賢治と中原中也」

プロムナード・トーク

◎テーマ展示

「祈りー中也の宗教性」

○文学碑除幕式の思い出

「嘉村礒多文学碑を巡って」 大平和登

「みつばの『おしたし』」 福田百合子

◎新収蔵資料紹介

谷川徹三宛献呈署名入り『山羊の歌』

『COME VENA D'ACQUA』（イタリア語訳『山羊の歌』所収）

◎企画展示

「文学サロンとしての酒場」

「河上徹太郎」

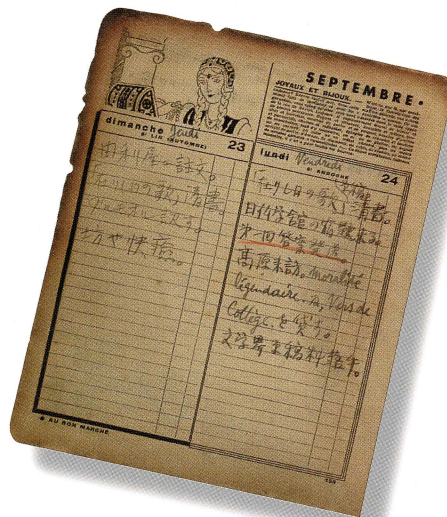
○読書会だより

○入館者 40 万人突破

主なできごと（平成16年度 行事記録）

第10回中原中也賞受賞作品

平成17年度行事予定



Chuya Nakahara Memorial Museum

中原中也記念館

館報2005

10

Public relations magazine

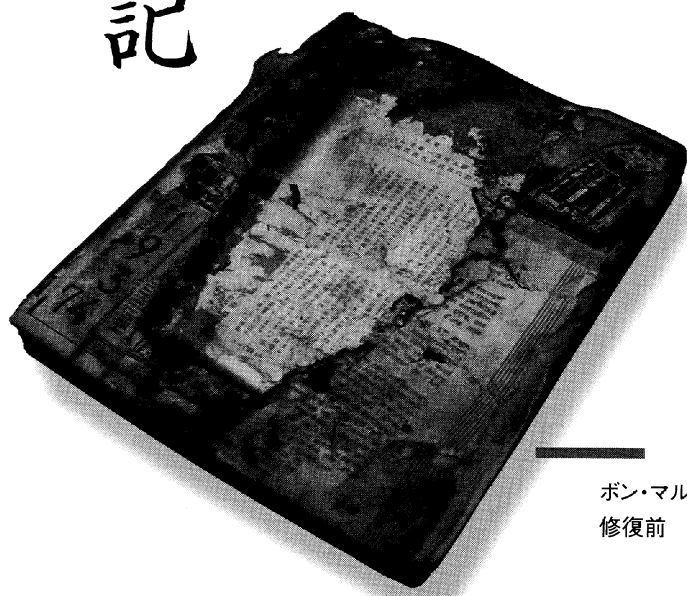
第10号

特別寄稿

Special contribution

I

ボン・マルシェ日記 修復こぼれ話



ボン・マルシェ日記
修復前

text=Hiroshi HATA
秦 博志

修復家・美術家

元東京修復保存センター職員

HATA studio 開設

鳥

取県の農村から絵描きを志して上京したものの、全国から集まってくる才能に打ちのめされていた浪人時代、中也の詩集をポケットに突っ込んで、都会の繁華街を彷徨っていた。20年前のことである。よく分からないながらもそんな振る舞いが格好いいと思っていた。未熟で才能もない自分を誤魔化すように口先だけはいきがついていたが、孤独には耐えられなかった。19、20歳の青臭い芸術論は、今思い返すと恥ずかしくて死んでしまいそうになる。まだ死にたくないのに、普段は忘れておくことにする。分別がついて少しは芸術が語れるようになったかというとなんことはないの、青臭い時期でなければ語れないことがあるのかもしれない。

中也の詩集をばらばらと拾い読みする、そのたびに新しい驚きがある。ゆっくり時間をかけて読み込むことはあまりなく、動悸が早くなって息苦しくなると閉じてしまうので、あまり良い読み手ではない。

平成15年に岡村前副館長から東京修復保存センターに日記修復のお話を頂いたときには一ファンとして期待しながら待っていた。実物を見るまでは……。

目を覆いたくなった。目の前の日記帖は焼け焦げによる欠失、炭化、水濡れによる固着および脆弱化、カビ、酸性劣化と様々な症状により、どこまででも崩れてしまいそうな状態であった。

被災直後の様子は不明であるが、消火の際に水を被り、そのまま乾いてしまったために、前半部分でページ同士が固着している。長期間濡れたままとなり、加水分解によって紙の脆弱化も深刻な状況である。前半部分の破損



修復前の打ち合わせ
佐々木幹郎氏（左）と
岡村前副館長（右）

は甚大で、破れて失なわれてしまった部分もある。ただ、これら固着部分の中也の書き込みは二ページほどであり、大半は救えそうであった。火事の中から故思郎氏が命がけで救出されたということであるが、その想いが生かされたのでは、と想像する。

一刻も早い処置が必要であったが、文化財修復の現場では、常に保存と利用の間でどう折り合いをつけるかが課題となる。当初、完全に保存する方法として全てのページを解体し、透明プラスチックフィルムに封じ込める方法を提案した。しかし、それでは生きた資料とならないとの佐々木幹郎さんの要望もあり、修復によって回復できる強度や製本による負担について慎重に検討した上で方針を決定した。修復作業において最も大切なのは的確な作業方針であると思う。実際の作業にあわせて軌道修正は随時必要であるが、方針がしっかりと定まれば、たとえ気の遠くなるほどの地道な作業であっても確実に前に進むことが出来る。佐々木さん、岡村さんの御尽力により、修復方針に関し十分な検討を行うことが出来たことは幸運であった。

新編中原中也全集の編集作業にまつわる苦労話を聞かせていただく機会があった。佐々木さんは原資料を手に採り、筆跡や文字のかすれなどからその時々の中也の心理状態を読み取ることで、見えてくるものがあると熱く語られていた。文学研究の迫力にただ圧倒された。資料に対する思いが語られるとき、修

復家としては身の引き締まる思いである。

佐々木さんが苦勞して入手された同年版ボン・マルシェ手帖をお借りし、全頁撮影した。この写真を手元におき、火災で失われてしまった形態や配列など、修復作業の折々に参考にしながらの作業が可能となった。

工房内では、私が中也に対する思い入れを公言して憚らないので、仕方がない、そこまですごくならん任せてやろうという雰囲気が出ていた。もちろん計算どおりである。ただ、予想以上に時間と手間が掛かる作業に組織としては問題もあったかもしれないが、周囲のスタッフの「思ったようにやっついでいい」という声にずいぶんと支えられた。

実際の作業についてはここでは詳しく触れないが、劣化要因が多岐にわたっていたので、それに合わせて作業内容も複雑にならざるを得なかった。当初、インクで書かれた文字が水性処理に耐えられるかという懸念があった。被災時に水に滲んでしまった箇所も見られる。水を使った修復作業によって更に滲むようなことがないかという点が最も大きな課題であった。スポットテストを繰り返した結果、インクは完全に紙繊維に吸着していて、更なる滲みの心配は全くない事が分かった。そこで初めて修復の計画を立てることができた。その他、固着部分をどう剥がすか、焦げ部分をどう補強するか、表紙をどう仕立てるか、本紙に負担のかからない糸かがりの工夫等々、難問が山積みであった。

主な作業は以下の通り。

現状記録・分析

解体

固着分離

クリーニング・整形

リーフキャストイング

和紙による補強

脱酸性化（中和）処理

全頁デジタル撮影

裁断・製本

桐箱作成



リーフキャストイング（筆者）

修復の柱となるのがリーフキャストイングという技術である。両面に文字があるため、裏打ちなどで補強すると文字を隠してしまう。本紙に合わせて配合した紙繊維を流し込み、周囲、及び欠損部にのみ補填した。

全体の作業の中でも固着の分離作業は多くの時間と労力を費やす事になった。通常水濡れによる固着は再度加湿することで結合が弱まり、剥がしやすくなるが、今回の場合は紙の強度が弱過ぎて、全く加湿に耐えられない状態だった。そこで指先の感覚だけを頼りに少しずつ剥がしていく事になった。作業は遅々



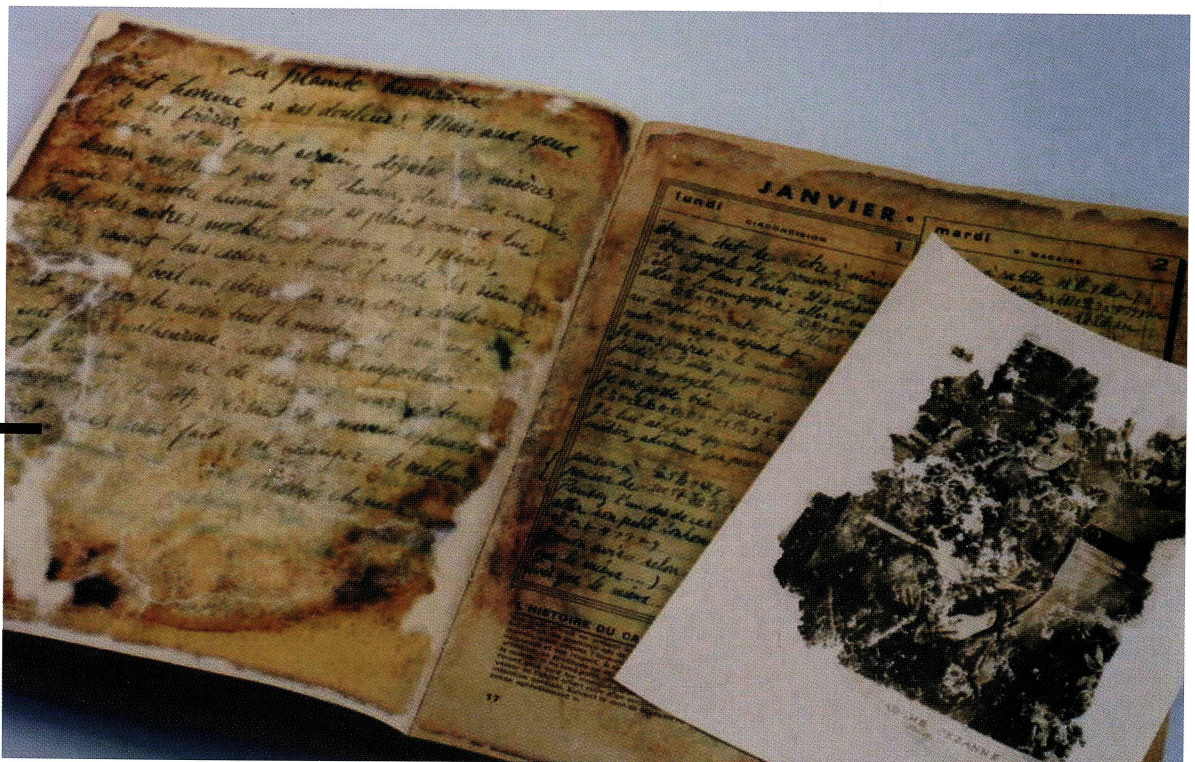
固着部分の剥がし作業

として進まず、夜、人気がなくなつた工房で一人作業していると、一体この作業は終わるのだろうか、と不安な時間ばかりが過ぎていった。

大変だったでしょう、と言われる。大変でない仕事などはないので、「ええ、まあ」と答えるが、私にとって一年にわたって中也の日記を手元に置いての作業は幸せであった。

残念なことに、修復作業の途中で中原美枝子さんの訃報を聞いた。「美枝子さんに見せたかったなあ」という佐々木さん、岡村さんの言葉が耳に残る。

私事になるが昨年、十年間在職した東京修復保存センターを退職した。今後も何らかの形でこの修復という一風変わった仕事に関わっていったら、と思う。ちょうど同じ頃佐々木さんは十年にわたって取り組まれた新編中原中也全集の大仕事を終えられた。佐々木さん曰く「いまだリハビリ中」とのことである。世界は全く違うが私も今そんな思いでいる。



ボン・マルシェ日記 修復後

ボン・マルシェ日記 修復こぼれ話

text=Hiroshi HATA

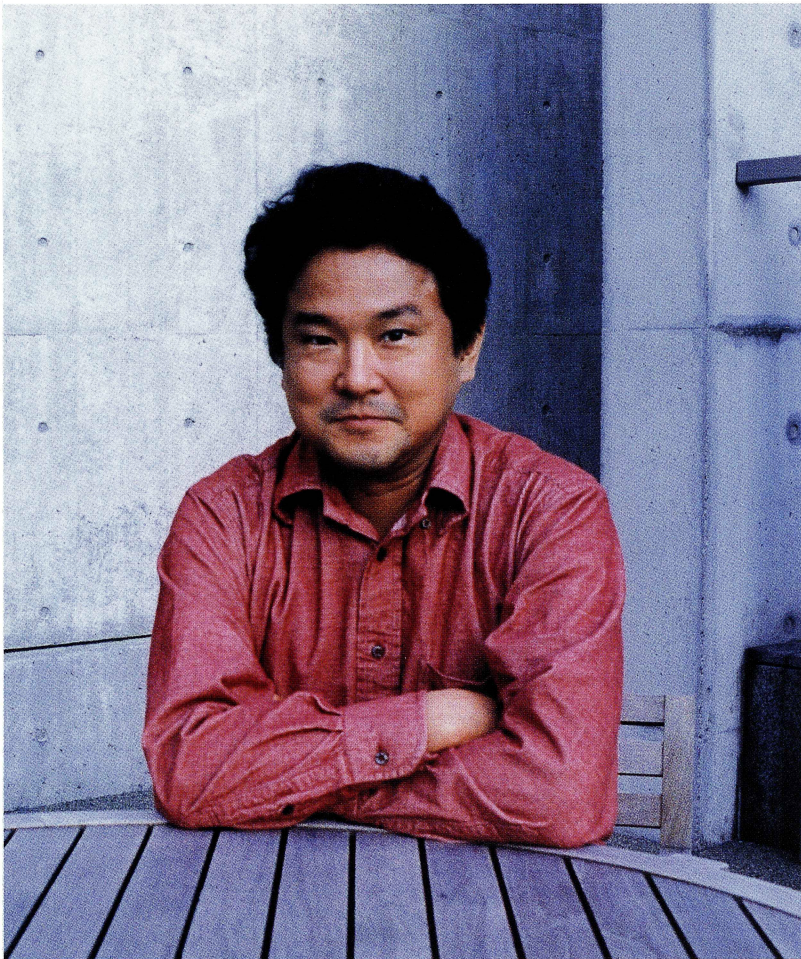
特別寄稿 — Special contribution — II

ちゅうとやーの

「中也ソングブック in 鎌倉」

コンサートレポート

時は2004年10月25日(月)、
鎌倉芸術館小ホールにて



text=Kensaku TANIKAWA

谷川賢作

Concert report
act October 25, 2004

ちゅう 「まずはぼくらの自己紹介からか？」

やー 「いいよ、そんなの簡単で。えーぼくらは作・編曲家でピアニストを名乗る、谷

川賢作の右肩と左肩にちよこんと、のっ

ている、まあ、妖精の一種である。ま

あ、ぼくらとしては頼りなくあぶなっ

かしい彼を守る、守護天使だと思っ

ているのだが、どうも感謝が足りんね、彼

は。ふんぷん」

ち 「ふん。まあ複雑なふりして単純なよう

でかつ、屈折してまるで中原中也の

ような賢作師匠のことはさておき、今

日ぼくらは、このすごい面々の結集し

たコンサートのレポートをすることに

なっています」

や 「あっそう そんなすごい人たちが

の？」

ち 「すごいよー 日本代表詩人にフォーク

の神様に民謡のエース、ときたまんだ」

「ほーそりやすばらしい！ で、うちの

師匠も例によって、このこおまけでくっ

ついてきてんのかい？」

ち 「それを言うなって。けっこう気にして

んだから、おっさん。ったく、七光りじゃ

ねえって言うてんのに、すごいじける

んだから」

や 「ははは。やつ 始まったぞ、コンサ

ート」

トップバッターは、ノンジャンル七色の
音色で魅了するヴォーカリスト、おおたか静
流さんと、比類なき美しく深い音色を聴かせ
るピアニストのフェビアン・レザ・パネさんの
デュオ。

ち 「しかし、この『紅葉』のピアノのイントロダクション、く〜美しい。今、聴衆がぐーっと中也ワールドに引きこまれたのが感じられた」

ち 「ご自身の詩だと、多少”てにをは”が違っててもイントロネーションが変でも、朗読はそのテークの持つ勢いでOKという、けっこうジャズマンな俊太郎さんなのに、中也の詩だと、完璧を期したんだって。レコーディングの時も神経細やかに何度も細かく録りなおしてたねえ」

ち 見事な三人のコラボレートの次は、地元鎌倉在住、ふらりと遊びにきたといったかんじの、特別ゲストの小説家、高橋源一郎さんの登場。谷川俊太郎さんとのトーク。

ち 「こらっ あほなこと言いなさんな。君の場合、別の愛撫がいいんだろ。声の愛撫は今日のような人生経験豊富なベテラン陣でこそさ。やはり一味違う、この気持ちよさ。ここからも最高の声が登場するよ」

や 「パネさん、相変わらず冴えてるねえ。ただ美しいだけじゃなく、うたとの間合いの取り方も最高だね。呼吸があつてるとはこのことだ」

や 「そう、やはり中也は別格、深い、おもしろいっ！て力説していたから、敬意を表しているのです。しかし、谷川俊太郎の、これは音楽でいうところの「カバー」めったに聞けないぞ、現代詩は自作朗読が基本だから」

や 「脱線しちゃうけど、源一郎さんの「ザ・明治文学」を一言で言いきった、「帝大生の主人公が身分違いの恋をするが結婚できずに挫折する」これ、ばかうけ！」

ち 再びステージは転換。さあ「フォークの神様」小室等さんの登場だ。

ち 「おっ『早春の風』が、そよそよ吹いてきたよ。しかし世界中の民族の声の可能性とエッセンス、いいとこどり、なんて言ったら失礼かなあ、おおたかさんの変幻自在の声もいつにもまして気持ちいいねえ。ところでこのホール、CD『中原中也ソングブック サークス』のレコーディングにも使わせていただいたんだけど、音の聞こえ方が自然でよいと思わない？」

ち 「いつもの親子セッションよりまじめにやってるね、二人とも。なんかおかしい」

ち 「最高だね。師匠単純だから、もう明治文学なんてわかったから読む必要ない、だってさ。今までだつて読んでないのに」

ち 「いよっ！ 待ってました。最近の小室さん、円熟味という言葉がともふさわしい。う〜ん洪い、いい声だなあ」

や 「うん、音の明瞭度がとてもクリア。無駄な残響もないし。鎌倉に縁のある中也だし、ここはすでに中也記念館御用達ホールだ。ああ、しかしすばらしい幕開けだ。もうこれだけで十分だよ。中也の世界に初手からどっぷりと。ああ幸せ」

や 「『うた』の親子セッションよりまじめにやってるね、二人とも。なんかおかしい」

ち 「あほだねー。すぐ感化される」

ち 「うまくって言ったって、それハートのことだからね。魂が先行して技術もさりげなくそれを追いかけていく。すばらしいねえ。しかもいつも変わらない音楽することに対する謙虚な姿勢。同じ音楽人として谷川賢作も爪垢せんじで飲まんといかんぞな もし」

ち 「おいおい。まだ始まったばかりだ」

ち 「おいおい。こんな世間知らずな楽師の集団、あんまり褒めすぎんよ。図にのるから。つまるところ、好きなことやっで好きーに生きてる輩だぜ」

ち 「そりゃあ源ちゃん一派が特別だろ。でも正直に、中也を引用するということがかっこよいのであって、実は実践のともなわれない恋愛、と言ってるのがかわいい」

ち 「出たがりだねえ、ほんとに。これは『宿酔』だ。ジャズクラブみたいのリラックスしていいかんじになってきたね。お客様もくつろいで気持ちよさそう。それにしても、ジャズっぽい曲弾いてる時のうちの師匠、生き生きしてる」

ち 「おいおい。まだ始まったばかりだ」

ち 「おいおい。こんな世間知らずな楽師の集団、あんまり褒めすぎんよ。図にのるから。つまるところ、好きなことやっで好きーに生きてる輩だぜ」

ち 「そりゃあ源ちゃん一派が特別だろ。でも正直に、中也を引用するということがかっこよいのであって、実は実践のともなわれない恋愛、と言ってるのがかわいい」

ち 「出たがりだねえ、ほんとに。これは『宿酔』だ。ジャズクラブみたいのリラックスしていいかんじになってきたね。お客様もくつろいで気持ちよさそう。それにしても、ジャズっぽい曲弾いてる時のうちの師匠、生き生きしてる」

ち 「おいおい。まだ始まったばかりだ」

ち 「おいおい。こんな世間知らずな楽師の集団、あんまり褒めすぎんよ。図にのるから。つまるところ、好きなことやっで好きーに生きてる輩だぜ」

ち 「そりゃあ源ちゃん一派が特別だろ。でも正直に、中也を引用するということがかっこよいのであって、実は実践のともなわれない恋愛、と言ってるのがかわいい」

ち 「出たがりだねえ、ほんとに。これは『宿酔』だ。ジャズクラブみたいのリラックスしていいかんじになってきたね。お客様もくつろいで気持ちよさそう。それにしても、ジャズっぽい曲弾いてる時のうちの師匠、生き生きしてる」

ち 「おいおい。まだ始まったばかりだ」

ち 「おいおい。こんな世間知らずな楽師の集団、あんまり褒めすぎんよ。図にのるから。つまるところ、好きなことやっで好きーに生きてる輩だぜ」

ち 「そりゃあ源ちゃん一派が特別だろ。でも正直に、中也を引用するということがかっこよいのであって、実は実践のともなわれない恋愛、と言ってるのがかわいい」

ち 「出たがりだねえ、ほんとに。これは『宿酔』だ。ジャズクラブみたいのリラックスしていいかんじになってきたね。お客様もくつろいで気持ちよさそう。それにしても、ジャズっぽい曲弾いてる時のうちの師匠、生き生きしてる」

ち 「おいおい。まだ始まったばかりだ」

ち 「おいおい。こんな世間知らずな楽師の集団、あんまり褒めすぎんよ。図にのるから。つまるところ、好きなことやっで好きーに生きてる輩だぜ」

ち 「そりゃあ源ちゃん一派が特別だろ。でも正直に、中也を引用するということがかっこよいのであって、実は実践のともなわれない恋愛、と言ってるのがかわいい」

ち 「出たがりだねえ、ほんとに。これは『宿酔』だ。ジャズクラブみたいのリラックスしていいかんじになってきたね。お客様もくつろいで気持ちよさそう。それにしても、ジャズっぽい曲弾いてる時のうちの師匠、生き生きしてる」

ちゅうとやーの
「中也ソングブック in 鎌倉」
コンサートレポート

Concert report
act October 25,
2004

てなことを言ううちに、アンコールに小室さん作曲の『サーカス』を演奏し、コンサートは名残おしまれながら終了。そしてなんと贅沢な出演者総勢七名によるサイン会へ。

ち 「ごったがえしてるなあ。しかも売れてるぞCD」

や 「そりゃあそうだろう。これだけのメンバー全員がサインが一気にもらえるのだから」

ち 「めったにない、というか、本日がぎり」

や 「中也記念館も大喜びだね。本家本元の記念館への来場者もこれで倍増？」

ち 「だいじょうぶ。あそこはスタッフの皆さんの取り組む意気込みが違う。歌舞音曲に頼らなくても、しっかり館内が魅力的に制作されていて、全国津々浦々からの来場者でいつも賑わっているよ」

や 「でも、たまにはその「歌舞音曲」でもりあげる事はいいやね」

ち 「同感。お祭り大好き。楽師はみんなあつ詩人もか」

ちゅうとやーによるコンサートレポート、いかがでしたでしょうか。本日も来場のお客様も、皆様満足げに帰宅の途につかれたのでした。次のコンサートはいつになるかわかりませんが、とても楽しみです。

や 「多喜雄さんのこの声もまた絶品としか言いようがない！ なんだらう、この心の深いところまで届いてくる感覚。じわ〜ん、日本人でよかったー」

や 「でもみんな忙しいからね。たまに集まるドリムチームでいいんじゃないの」

や 「あちゃー。調子にのって今度は『詩人は辛い』だ。小室さんとデュエットしてよ、しようがねえなあ。これ歌詞もお客様を挑発してるんだよね。♪みんなな歌ぞ聞いてはい〜ない〜 だもんな」

ち 「詩を書かない、ってことを歌におきかえる中もひねくれてるけど。でも、なんだあ、結構笑いとったり、うけてるぞこの歌。これ以上調子にのって今までの雰囲気をごわさないほうがいいと思うけど」

ち 「さすがだね、そのより高次元の表現へ向かっての集中力」

ち 「うん。さっきの世間知らず楽師発言、少し反省。訂正はしないけど」

や 「しかしなんだね、今日は中也がメインテーマだけど、これだけ個性豊かないろいろな声の音色を味わうことができたのは大収穫。これぞコンサート、生演奏だからこそその醍醐味」

そうこうするうちに「民謡のエース」伊藤多喜雄さんが二人にジョイント。

ち 「たしかに、とても楽しめた。一回限りじゃあもつたいない。このチームで全国巡業すればいいのに。中也オールスターズ。それに、まだまだこの「中也ソング」の名曲を聴いてくれ！ っていうミュージシャンも大勢いるぞ」

中原中也ソングブック
サーカス

リニューアルを記念して制作したCDです。


【曲目】

- 1 早春の風 おおたか静流
- 2 六月の雨 おおたか静流
- 3 月夜とポプラ フェビアン・レザ・パネ (ピアノ・ソロ)
- 4 Sketch of Chuya act 1 一つのメルヘン〜春の日の夕暮〜正午 谷川俊太郎／谷川賢作
- 5 曇天 小室等
- 6 宿酔 小室等
- 7 Sketch of Chuya act 2 言葉なき歌〜春日狂想〜朝鮮女〜また来ん春…… 谷川俊太郎／谷川賢作
- 8 雪が降つてゐる…… 深川和美／谷川俊太郎
- 9 丘の上サあがつて 伊藤多喜雄
- 10 サーカス ＊草野心平
- 11 サーカス 小室等

＊レコード「中原中也の世界」(昭和49年中央公論社発行)より

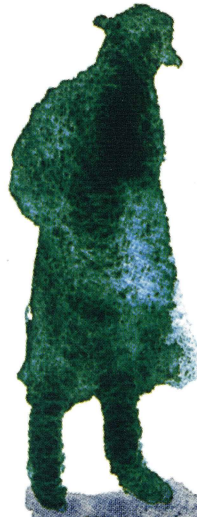
価格 3,000円(税込)

記念館で販売しています。ホームページ、電話でのご注文も承ります。(送料別途)





オープニング



特別企画展

宮沢賢治と中原中也

平成16年7月28日(水)～10月11日(月)

中原中也が詩集『春と修羅』を通じて宮沢賢治から多大な影響を受けたことはよく知られています。平成16年度の特別企画展では、宮沢賢治記念館、林風舎をはじめとする多くの方々からお借りした賢治ゆかりの品々を通じて賢治の人と文学を紹介するとともに、賢治と中也の作品の比較を通じて、ふたりの文学世界の関わりを紹介しました。

【第Ⅰ部】宮沢賢治の登場

宮沢賢治は同時代の多くの人々にとっては地方の名もなき一青年でしかなかったわけですが、その才能をいち早く評価し作品発表の場を与えたのは、森佐一、草野心平、尾形龜之助ら同時代の文学者たちと、弟の宮沢清六氏でした。こうした先人たちの最初の全集刊行に至るまでの足跡を、賢治の生前に刊行された『春と修羅』『注文の多い料理店』、および雑誌「貌」「銅羅」「月曜」や清六氏が編んだ文集『宮沢賢治全集抜粋 鏡をつるし』を中心に紹介しました。

【第Ⅱ部】宮沢賢治の世界

・宮沢賢治の生涯

少年時代に多大な影響を受けた島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』、初めて短歌が掲載された同人誌「アザリア」、父に宛てた書簡、愛用の手帳、遺言によって没後に配布された『国訳妙法蓮華経』など、賢治ゆかりの品々を展示するとともに、賢治の生涯を年表形式にまとめました。

・詩の世界

賢治は、短歌、口語詩、文語詩、俳句・連句など数多くの詩歌を残しています。『春と修羅』が「心象スケッチ集」と名づけられていたことが示すように、賢治の詩においては、自己の内面ばかりでなく外界をも反映した「心象」を生起するままに写し取ることが基本にありました。展示では、『春と修羅』第一集の「雲の信号」「岩手山」「無声慟哭」、同じく第二集の「夜の湿気と風邪がさびしくいりまじり」「業の花びら」、手帳に残された「雨ニモマケズ」を、その草稿とともに紹介しました。

・童話の世界

賢治童話は、『注文の多い料理店』収録の九篇や雑誌や新聞に発表されたものの他、多くは未定稿のかたちで残されています。その基本精神は、『注文の多い料理店』に冠された「ハトブ童話」という言葉に集約されているように、岩手県の自然と風土に根ざし、〈新しい、よりよい世界の構成材料を提供〉する〈法華文学〉の創造にありました。「注文の多い料理店」「なめとこ山の熊」「風野又三郎」の三篇を草稿とともに紹介しながら、賢治童話に表現された世界観や死生観を感じ取っていたかのように構成しました。

【第Ⅲ部】宮沢賢治と中原中也

—— 交響する宇宙観

京都時代に富永太郎を通じて賢治を知り、

「春と修羅」を購入して知人に配るなどしていた中也は、『宮沢賢治全集』の刊行を機に書かれた「宮沢賢治の詩」などの一連の評論を書きますが、そこには、賢治の「心象スケッチ」という方法を正確に理解し、宇宙的な時空感覚と根源的な生命感に根ざしたりリズムに共鳴している中也の姿がありました。

詩においては、「春と修羅」や「原体剣舞連」の影響が「サーカス」「修羅街輓歌」などにみられるほか、「永訣の朝」を始めとする妹トシの死をモチーフとした一連の詩が、弟の恰三や長男の文也の追悼詩などに影響を与えています。また、中也には「銀河鉄道の夜」に触発されたと思われる童話「夜汽車の食堂」がありますが、いずれも単なる模倣に終わらず、中也自身の個性も発揮されています。

ここでは、草稿や初出雑誌の展示を通じて、賢治と中也の作品を比較しながら、ふたりの世界の深いつながりについて紹介しました。



展示風景 (宮沢賢治の生涯)

プロムナード
・トーク
Promenade
Talk



平成16年8月21日(土)、9月23日(木)に、「プロムナード・トーク」と題して、中原副館長による平成16年度特別企画展「宮沢賢治と中原中也」の展示説明を行いました。「プロムナード」とは、フランス語で「散歩・逍遙」。美術館などで行われている「ギャラリートーク」にならったもので、絵画の陳列された「ギャラリー」とは少し性格の異なる、本や雑誌などを中心とした記念館の展示の解説を、散策気分楽しんでいただきたいと思いますということで名づけました。

当日、午後3時より2階の展示室にて、特別企画展の第三部「宮沢賢治と中原中也——交響する宇宙観」の内容を中心に、中也が早い時期から賢治に注目していたことについて、また、賢治と中也の詩や童話の世界を比較し、その宇宙観の響きあっていることについて詳しく解説。参加者は解説を聞きながら、賢治の名前が記された中也の日記や、直筆原稿(複製)、作品が発表された雑誌などを観ておられました。

約30分の解説の後は、館内を自由に散策。中には4時間も滞在してくださる方もあり、それぞれ楽しんでいただけたようです。両日、約30名の方にご参加いただきました。



展示説明の様様



第2回常設テーマ展示

祈り

i n o r i

——中也の宗教性

死

の時には私が仰向かんことを！
の一行に始まる「羊の歌」の第一節「祈り」や、
「祈るよりほか、わたくしに、すべはなかつた……」と結ばれる「妹よ」など、中也の詩に祈りの言葉をみることが少なくありません。第2回の常設テーマ展示では、こうした祈りの詩を紹介しながら、それが生み出された背景をたどります。

はじめに、「羊の歌」第一節「祈り」を通じて、詩に込められた中也の祈りの特徴を捉えます。

「1、その背景」では、中也が少年時代に接したキリスト教と仏教からどのような影響を受けたかを紹介します。中原家と親交の深かったピリオン神父の葉書や中也を鎌倉の教会へ伴った西川マリエゆかりの品、山口中学校時代に修養生活を送った大分県西光寺の住職東陽円成の著書などを展示します。

「2、神を呼ぶ」では、「寒い夜の自我像」「妹よ」「悲しい歌」の草稿や初出雑誌を展示し、詩に現れた神への呼びかけを通じて、中也が神に求めていたものは何かを紹介します。

「3、中也の宗教観」では、評論や日記を中心に、中也の宗教観の特質や時代的な変遷を紹介します。展示するのは、「地上組織」の草稿や「新文芸日記」「千葉寺雑記」などです。

平成17年2月18日(金)

～平成18年2月15日(水)

(特別企画展の期間を除く)

「4、宗教詩人」では、中也のもつ宗教性を深く理解していた友人たち、関口隆克、河上徹太郎の文章を紹介し、小林秀雄に贈られた「我が祈り」を鑑賞していただきます。

「中也の読書」のコーナーでは、中原家で使用されていた机と、鎌倉で生活していた時代に使用していた本棚とともに、中也の宗教観に影響を与えた書物を展示し、その内容を紹介します。

また今回は、展示デザインと吹き抜けの壁に投影する映像展示との連携をはかった他、NTT西日本による新しい音声ガイドシステムの開発に協力する方たちで、展示を観ながら音声による解説や音楽を聴くことができるようにして、多角的に中也の世界を感じ取っていただけるように工夫しています。

文学碑 除幕式の

思い出

嘉村儀多文学碑を巡って

大平 和登

嘉村儀多文学碑の設立を筆者が提唱して、当時（昭和32年）存命中の儀多義弟栄氏ほか、地元の有志のご協力を得て、儀多が知的関心を持った雪舟に因む庭園のある常栄寺の門前に文学碑が建立された。

その記念に、当時の山口大学の講堂で嘉村文学を評価する文学者河上徹太郎と井伏鱒二が来山して講演することになった。

河上は岩国の出身で、昭和10年頃の文学活動期は、同郷作家嘉村を良く知る友人でもあった。河上の支えがなかったら、筆者の文学碑建立のアイデアも実現しなかったであろう。

筆者の嘉村再興の意図は、中原中也の研究を視野に入れながらも、先ずは、ユニークな自己解剖をしっかりと文体で表現し、私小説を越える聖なる告白文学を実現した孤高な郷土作家の文学史的な再評価を、先ず、試みたものであった。

戦後の時代風潮のひとつであった、私小説作家批判のなかで、嘉村の独自性は風化した（私



を弄ぶ他の私小説作家とは異質なのだと言者は認識していた。その上に、同郷人という地縁意識、更には、いま再評価しておかなければ、このまゝ、文学史の片隅に埋もれてしまうといううひそかな危機意識も持っていた。当時、青春の情熱を文学に賭けていたので、大学時代の東京で河上周辺の幾多の文人たちに、筆者の嘉村観を披瀝して、文学者たちの賛同を得たのであった。

特に、石川淳、三好達治といった個人的にも尊敬していた先達からこのことで励まされたことは、生涯忘れられない思い出となった。

文学碑建立に続く、嘉村全集の出版は、筆者の初めての東宝の海外派遣要員の一人としての渡米には、まれて、結局帰国するまで実現しないことになったが、60年代の後半にはそれも出版され、わが青春時代の重要な文学的な実績のひとつになった。

文学記念碑の講演会当日、作家井伏鱒二が風邪で訪山出来ず、フランス文学者で井伏の親友でもあった同じ町荻窪の住人河盛好蔵教授が、井伏の講演ノートを代読された。

この原稿の代読だけでは短かいので、急拠筆者が前座を受け持てと云われて、嘉村略伝」と

いう、嘉村への関心を、思いつくまに一時間ばかり話したが、準備稿もないぶっつけ本番なので、冷汗三斗の思いがしたのを覚えている。その時の記念写真の中に、もうひとり宮内義治が、河上に同行して写っている。若い時は詩人で、料理人であった宮内は、「ブーちゃん」の愛称で親しまれていた。

この写真は、筆者の青春の面影を留めた、大切な思い出の一片なのである。

（おひらかずと）演劇評論家。若い時から河上徹太郎に師事し、東宝株式会社入社後、ニューヨークに駐在「ブロードウェイ」等の著作を発表。日米のミュージカルの交流に尽力し、平成16年3月に日米交流百五十年記念外務大臣賞受賞。

みつばの「おしたし」

中原中也記念館館長

福田百合子

中也の作品「帰郷」の一節が湯田高田公園に文学碑として建てられ、その除幕式には、河上徹太郎、小林秀雄、大岡昇平、今日出海という友人たちが前日から泊まり込んで揃って出席しました。作家・評論家として当代一流のこの人たちは、若くして亡くなった中也を心から惜しみ、懐しむ様子でした。式典終了後、市内の文学愛好者による座談会がホテルの一室で開かれたのですが、河上徹太郎の姿が見えませんが探しに行くと、徹太郎はロビーの片隅にうずく

まっつて泣いて泣いて、しきりに掻きまくどくように吠えているのです。「みつばのおしたしが食べたいよう。中也が好きだったあのみつばのおしたし……」。これは中也の作品「骨」に「ホラホラ、これが僕の骨だ、生きてゐた時に、みつばのおしたしを食つたこともある……」と歌われたものです。その思い出にたゞたゞやるせなく、切なく、酔いに身をまかせ、涙にくれる徹太郎の姿は、中也と親しく芸術を語つた頃の青年のまゝ、のようでした。

この座談会の後、一同は吉敷墓地の中原家のお墓参りに出かけました。

遅れてしまった徹太郎を案内し、その後から田圃の一本道を辿りつゝ、私もみつばのおしたしとつぶやき、中也と徹太郎の遙かな青春を思い描きしのだことです。



谷川徹三宛献呈署名入り『山羊の歌』

鎌倉芸術館で記念館開館10周年記念として作成した「中原中也ソングブック サークラス」のレコーディングの際に、谷川徹三の長男である谷川俊太郎氏より、谷川徹三宛中原中也献呈署名入り詩集『山羊の歌』の寄託を受けました。

谷川徹三は明治28年生まれ。中也より12歳年上です。愛知県出身で、大正11年に京都帝國大学哲学科を卒業。同志社、龍谷、法政などの大学でドイツ語や哲学を教え、昭和3年に法政大学哲学科教授となり上京、阿佐ヶ谷で暮らし、後に法政大学の総長を務めます。平成元年に94歳で亡くなりました。

中原中也は昭和9年12月10日に第二詩集『山羊の歌』を出版、徹三には限定番号第16部を寄贈していますが、徹三と中也の接点はどこにあったのでしょうか。中也の残した文章には徹三の名は出てきませんが、徹三の方も中也について触れた文章は見当たりません。

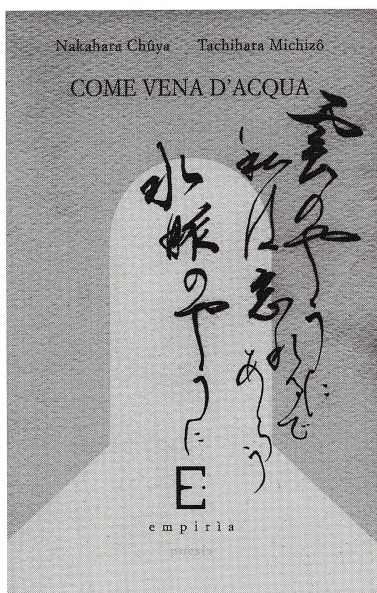
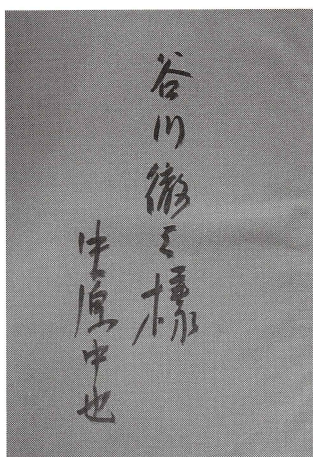
しかし、長男の俊太郎氏は「うちの父は中也自身にも会っているはずですし、中也と交友の深かった古谷綱武は、父のところに入入りにしているなかでいちばん親しくしていた人」(シンポジウム「中原中也と童謡の時代」『中原中也研究』第4号収録)と語っています。中也は昭和3年に古谷綱武(明治41年生)と知り合い、共に「白痴群」の同人となり交流を深めま

すが、古谷は大正15年には谷川徹三を訪ねており、以後生涯の師としています。

長谷川泰子は小林秀雄と別れた昭和3年頃、東中野の喫茶店「ゆうかり」に入入りしており、徹三も行っていたと証言しています。

小林秀雄は、昭和6年に徹三の著書の評論を書き、以後彼と面識があったようです。青山二郎は昭和6年12月に開場した小劇場「ムラン・ルージュ」によく足を運んでおり、徹三も常連だったといえます。

古谷、小林、青山などを介して、または友人達が集う同じ場所、徹三と中也は出会う機会があったのではないのでしょうか。にもかかわらず、どちらもお互いについて全く言及していません。多くの友人は強烈な中也の印象を文章にしていますし、中也は詩や日記に友人の名をよく記しています。何も書かないということは逆に相手を強く意識してのことだったのかもしれません。



『COME VENA D'ACQUA』(イタリア語訳『山羊の歌』所収)

イタリアの出版社Empiriaから刊行された『COME VENA D'ACQUA』を翻訳者の方からご献本いただきました。この本は、中也と立原道造の詩をアンソロジー形式で訳したもので、翻訳はイタリア在住のMassimo Soumare氏、鎌田祥代氏とFederico Madaro氏(お二人はご夫婦)によるものです。

Soumare氏は、日本の古典から現代の幻想小説まで数多くの翻訳を手掛けてこられ、メールで出版に関する情報をいろいろ提供してくださいました。また、鎌田・Madaro夫妻は、去年の8月、中也記念館に来館され、イタリアにおける日本文学の翻訳状況について興味深いお話をうかがうことが出来ました。お二人のお話によれば、中也の詩はとても抒情的で、イタリア人の感覚にも合いやすいのだそうです。

News!

中原中也記念館2階のビデオ放映室で上映しているTYSビジョン制作の「中原中也の軌跡」(15分)は、「全映協フォーラム2004 映像コンテスト」中四国地区の短編VP部門(文化・芸能・観光)で最優秀賞を受賞し、さらに金沢の全国大会では、優秀賞を受賞しました。

この翻訳詩集には、中也の『山羊の歌』と立原道造の『萱草に寄す』『暁と夕の詩』『優しき歌』が掲載されており、ソフトな黄色表紙には、立原の「またある夜に」の一節「雲のやうに／私らは忘れるであらう／水脈のやうに」が引用されています。字はトリノ在住の書道家・平岡かずこ氏によるもので、日本的なやわらかい情趣を表そうとして草書体で書かれており、洒落た装幀となっています。

見開き2ページで、日本語の原文とイタリア語の翻訳が両方記載されているので、イタリア語が分からなくても、日本語と対照させながら眺めてみるとなかなか面白いでしょう。

この翻訳詩集が刊行されたことによって、イタリアでも、中也や立原の詩に親しむ読者が増えるに違いありません。中也の詩が、世界の国々で翻訳され読まれることで、日本と外国との文化交流もより盛んになっていくのではないのでしょうか。

Review

企画展示

文学サロン としての酒場

平成16年10月14日(木)～平成17年1月23日(日)

中 原中也は酒を愛し、酒にまつわる詩を多く残していますが、それらは様々な文学仲間たちとの交友を重ねた文学サロンとしての酒場から生み出されたものです。はたして中也は、どんな酒を好み、どんな文学者たちと、どんな議論をたたかわせていたか、また、それは中也の詩にどのように反映しているのか。そんな観点から、中也とその友人たちの酒にまつわる詩やエッセイを、大正末から昭和の初めのビールのポスターや酒器をまじえながら展示しました。



展示風景(当時のビール瓶や酒樽)



昭和初期のビールのポスター

中也はビールを好んでいたらしく、日記や手紙にもたびたび登場しますが、詩に歌われたものとしては、「青木三造」や「お道化うた」のような戯歌調のものから、「雪の宵」「溪流」のような深い悲しみを滲ませるものまで、酒の種類とともに飲酒の情景も様々です。

中也は独酌も好んだようですが、もっとも酒を飲んだのはもちろん交友の場でした。河上徹太郎、大岡昇平、青山二郎、草野心平、安原喜弘らは、酒席での中也のふるまいを多く書き残しています。これらの友人について中也が書き残したものと対比させながら、文学サロンとしての酒場の雰囲気や醸し出せるように構成しました。友人たちが異口同音に言及するのが中也の壮絶な「からみ」ですが、彼等はそれが中也独特の詩魂や批評精神のやむにやまれぬ発露であることを理解していました。また、「夜空と酒場」「酒場にて」など、中也が酒場を通じて生み出した詩には、批評精神と孤独感が表現されています。

文学や音楽の関係者に交友が限られる中也にとって、酒場は実生活者と直接触れあう場でもありました。居合わせた見ず知らずの人の会話を割り込んで議論や喧嘩をふっかけていたという中也は、酒場を通して「対人圏」を見つめ批判していたのだといえます。また、「女給達」のような詩では、酒場に当時の時代性を見出していたのです。

中

也のよき理解者河上徹太郎とは、一体どのような批評家だったのでしょか。音楽評論から出発して文芸批評の開拓者となり、山口県・岩国に郷愁を感じていた批評家、河上徹太郎の多彩な評論活動と、その功績について紹介しています。

1 音楽批評家からの出発

河上徹太郎は、18歳からピアノを習い始め、東京帝国大学経済学部在籍中に音楽評論家としてデビューしました。音楽青年であった徹太郎に焦点をあて、ピアノに関するエピソードや、楽団スルヤとの関わりを紹介し、彼の主要な音楽評論集、書評の直筆原稿などを展示しています。徹太郎がピアノの練習で弾いていたという、シューマン作曲「ピアノと管弦楽のための序奏とアレグロニ短調作品134」も聴くことができます。

2 文芸批評の開拓者

徹太郎は、昭和2年の春頃中也と出会い、中学時代からの親友小林秀雄の影響もあって、文学に没頭するようになります。「ヴェルレーヌの愛国詩」発表後、徹太郎は多くの文芸評論を書いて、小林と並び称される文芸批評の開拓者となっけていきます。文学者や思想家を、アウトサイダー「異教徒」という独特な視点から捉えた点、徹太郎自身、日本のアウトサイダーの一人だったと言えるかもしれません。

企画展示

河上徹太郎

平成17年1月26日(水)～4月17日(日)



展示風景



高田公演の「帰郷」詩碑除幕式に参加した時のコマ

第一評論集「自然と純粹」をはじめ、「日本のアウトサイダー」他の代表作を展示しており、『有愁日記』の直筆原稿や徹太郎直筆の短冊、日本芸術院賞賞牌などもご覧いただけます。さらに、親戚・河上肇に関する徹太郎の談話を肉声で聴くことも出来ます。

3 山口・岩国を「古里」として

徹太郎は長崎で生まれ、少年時代から主として東京で生活していましたが、本籍は父の実家があった岩国です。岩国に関するエッセイも多数書いており、昭和47年12月、岩国の社会・文化の興隆に尽くした文化人として、岩国市名誉市民にも選出されています。徹太郎は、心の古里を岩国に求め、山口県ゆかりの文学者として中也や嘉村儀多にも親近感を抱いていました。

岩国に関するエッセイを紹介するとともに、岩国市名誉市民に選出された時の賞状や「岩国おとこに萩女」と書いた徹太郎直筆の萩焼茶碗等を展示しています。また、磯多や中也の文学碑除幕式に参加した時の様子を見ていただきながら、福田百合子館長による談話もお楽しみいただけます。

徹太郎の評論を通して、彼と交流のあった人達の様々な人間性が見えてくる——そこに「己」をだしにして対象を語ることを自らに課した批評家の醍醐味もあったのではないのでしょうか。

1937年、30歳で夭折した中原中也—
 没後60余年を経た今日、
 その詩はさらに輝き、愛誦されつづける。
 角川版旧全集を全面改訂、
 30年ぶりの本格的・新編「定本」全集!

新編 中原中也全集

全5巻+別巻

【編集委員】

大岡昇平・中村稔・吉田照生・
 宇佐美斉・佐々木幹郎



各巻、前例のない画期的二分冊構成

- ◆「本文篇」=厳密な校訂による新本文の確定
- ◆「解題篇」=各作品の成立・推敲過程を評述

- 第1巻 詩Ⅰ
 新発見詩篇2
- 第2巻 詩Ⅱ
 新発見詩篇2
- 第3巻 翻訳
 新発見散文3
- 第4巻 評論・小説
 新発見草稿4
- 第5巻 日記・書簡
 新発見「療養日誌」・新書簡31
- 別巻 (上)写真・図版篇
 (下)資料・研究篇
 (第6回配本)初公開資料多数

全巻
 発売中

造本

四六版・並製・カバー装・美装貼面入
 各巻[本文篇][解題篇]二分冊(分売不可)
 第1巻~第5巻、別巻
 本体 8,190円~13,850円(税込)

角川書店

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
 TEL03-3238-8521 FAX03-3262-7734

読書会だより 「中原中也を読む会」

中原中也記念館では、より多くの方々にも
 也の作品に触れる機会を持つていただきたい
 と思い、毎月一回、山口情報芸術センターに
 て「中原中也を読む会」を開いています。

平成16年4月と5月に準備会を開き、6月
 から正式にスタートして、これまでに、のべ
 百名の方が参加されました。参加者の年齢層
 は幅広く、大学生から長年の経験を積んでこ
 られた方々まで、初めて詩に触れる方や卒業
 論文を控えた方、短歌・俳句などを創作して
 おられる方などさまざまです。

参加者の読みたい作品はもちろん、記念館
 で開催した特別企画展「宮沢賢治と中原中也」



と関連させて賢治と中也の作品を読み比べて
 みたり、企画展「文学サロンとしての酒場」
 に触れてお酒に関する中也の作品を読んでみ
 たり。他にも「春と赤ん坊」「雲雀」などの子
 供に関する作品や、「港市の秋」「雪の賦」「春
 日狂想」など季節に関する作品を選んで、参
 加者のみなさんとともに中也の詩の魅力を探
 っています。

中原中也に関心のある方、中也のことをも
 つと知りたい方、一緒に中也の作品を読ん
 でみませんか。いろいろな方と読むと、一人
 では見えなかった作品の世界が広がってい
 きます。どうぞ、お気軽にご参加ください。

毎月第4金曜日13時30分~15時、参加無料。
 詳しくは中原中也記念館まで。

News

開館10年目 入館者数40万人突破

平成16年9月17日、記念館は開館以来40万
 人目の入館者を迎えました。
 40万人目となったのは、滋賀県彦根市の医
 師勝馬徳一さん(87)です。

勝馬さんには福田百合子館長から、昨年2
 月のリニユーアル記念で製作されたCD「サ
 ーカス」が贈られました。また、宮沢賢治の
 書の複製額「雨ニモマケズ」も併せて手渡さ
 れました。これは、当時開催中の特別企画展
 「宮沢賢治と中原中也」にご協力いただいた
 林風舎よりご提供いただいたものです。

勝馬さんは「大変感激。よい旅行になりま
 した。長生きしてまた来たい。」と話しておら
 れました。



勝馬さんはこの日ご友人と湯田温泉に
 旅行に訪れ、記念館に立ち寄られました。

4月3日	中原中也直筆原稿受贈に伴う一般公開 (於 ホテルニュータナカ)				
20日	企画展「第9回中原中也賞」(～5月23日)				
23日	読書会 第1回準備会 (於 記念館分館)				
29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者13名) ピエール・バルレーLive				
		ライブ風景			
	第9回中原中也賞贈呈式 (於 ホテルニュータナカ) 主催 山口市 受賞詩集 『昼も夜も』(ミッドナイトプレス社) 久谷雉 記念講演 「人々称んで退屈となす所のもの」 講師 堀江敏幸				
	第8回中原中也賞英訳本贈呈 『火よ!』中村恵美				
5月1日	中原中也記念館運営協議会 (於 山口情報芸術センター)				
26日	読書会 第2回準備会 (於 山口情報芸術センター)				
29日	企画展「続・中也の書」(～7月25日)				
	中原中也の会第8回研究集会 (於 鎌倉芸術館) 「鎌倉時代の中原中也」 特集『ボン・マルシェ日記』修復から見えてきたもの 1.「修復の報告」秦博志 2.「中原中也のフランス語」大出敦 3.「晩年の日記帖について」佐々木幹郎 講演 「鎌倉の中也」 講師 三木卓				
6月25日	第1回中原中也を読む会 (於 記念館分館)				
7月28日	特別企画展「宮沢賢治と中原中也」(～10月11日)				
30日	第2回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)				
8月21日	特別企画展プロムナード・トーク				
27日	第3回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)				
31日	機関誌「中原中也研究」第9号発行				
9月11日	中原中也の会第9回大会 (於 ホテルニュータナカ) 「詩の本源へー宮沢賢治と中原中也Ⅱ」 パネルディスカッション「宮沢賢治と中原中也 ー本源をめぐるスタンスとディスタンス」				
					パネリスト 栗原敦 吉田文憲 青木健 アトラクション 「中也を想ひて笛を吹く」 フルート演奏 山田英人 講演 「抒情と抒情を超えるものー賢治と中也」 講師 原子朗
			12日	中原中也の会第5回セミナー 特別企画展「宮沢賢治と中原中也」探訪 講師 中原豊 (於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館)	
			17日	入館者数40万人達成	
			23日	特別企画展プロムナード・トーク	
			24日	第4回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			29日	公開講座 (於 山口情報芸術センター) 「中也・賢治・山頭火ーその生命律をめぐって」 講師 佐藤泰正	
			10月14日	企画展「文学サロンとしての酒場」(～2005年1月23日)	
			22日	中也命日・お墓参り 第5回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			23日	中原中也記念館運営協議会 (於 山口情報芸術センター)	
			25日	「中原中也ソングブック in 鎌倉」 主催 (財)鎌倉市芸術文化振興財団 (於 鎌倉芸術館)	
				鎌倉でのコンサート ピアノを演奏する谷川賢作氏	
			11月26日	第6回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			12月24日	第7回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			2005年		
			1月26日	企画展「河上徹太郎」(～4月17日)	
			28日	第8回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			2月18日	第2回常設テーマ展示「祈りー中也の宗教性」 (～2006年2月15日)	
			25日	第9回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			3月11日	第10回中原中也を読む会 (於 山口情報芸術センター)	
			31日	館報第10号発行	

●第10回 中原中也賞

『オウバアキル』
みすみ
三角みづ紀



Chuya Nakahara prize

第10回目の中原中也賞の選考会が、2月19日に西村屋旅館「葵の間」で開かれ、応募作品300冊の中から、三角みづ紀氏の『オウバアキル』（思潮社）が選ばれました。



一一一 角氏は、受賞時23歳、東京造形大学に在学。第42回現代詩手帖賞の受賞を機に、この詩集をまとめたのだそうです。装幀に使われている写真も三角氏ご自身の作品です。

選考会では「日々の生活にひそむ不安、現代における若者の心的状況を、鋭くふかく凝視した上で、逆にそうした心情をかるやかに平静にうたいきった」と、豊かな才能を評価されました。

君は私を底辺として。
育っていく
そっと太陽に手を伸ばす
腕、崩れる

「私を底辺として。」より
詩を書き、「痛くて泣いて仕舞う時もあります。」それでも書き続ける詩人彼女が、これからどんな世界を言葉で紡ぎ出してくれるのか、目が離せません。

第11回
中原中也賞

作品
募集

【対象】
平成16年12月1日から
平成17年11月30日までに刊行された
現代詩の詩集（奥付の刊行年月日による）

【応募締切】

平成17年12月16日（当日消印有効）

【賞】

正賞及び副賞100万円

【応募方法】

著者本人が、同じ詩集を
三部送付してください。
また、「中原中也賞応募」と明記の上、
①郵便番号 ②住所
③本名 ④年齢 ⑤電話番号
を記入したものを一部同封して下さい。

【発表】

平成18年（2006年）2月の
選考会終了後、
報道機関を通じて
発表します。

送付先

〒753-0056
山口市湯田温泉1丁目11-21
中原中也記念館 気付
「中原中也賞事務局」行

◎平成17年度 記念館関連行事予定

2005年4月—2006年3月

4月19日	企画展「第10回中原中也賞」 （～5月29日）	7月27日	特別企画展「中原中也と西洋音楽」 （～9月25日）	10月22日	中也命日・お墓参り
29日	生誕祭 空の下の朗読会 （於 中原中也記念館前庭）	8月31日	機関誌「中原中也研究」 第10号発行	平成18年 〈2006〉 2月1日	企画展「嘉村磯多」 （～4月下旬）
6月1日	企画展「中原中也—花と言葉の詩 画集—若林佳子 押し花アート原画 展」（～7月24日）	9月10日	中原中也の会第10回大会 （於 ホテルニュータナカ）	2月18日	開館12周年 第3回常設テーマ展示 「詩人をはぐくんだ風土・山口」（仮）
4・5日	中原中也の会第9回研究集会 （於 軽井沢中央公民館）	11日	中原中也の会第6回セミナー		※日程等、変更の場合もございます。
		28日	企画展「中也と流行歌」（～1月29日）		

中原中也記念館 館報【第10号】平成17年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口市山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/ 表紙写真 | ボン・マルシェ日記

環境に配慮し、用紙には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。